

訃 報

織田武雄先生を悼む

高 橋 正



京都大学名誉教授で本会元会長の織田武雄先生（人文地理学会・日本地理学会元会長）は、2006年10月18日にお亡くなりになった。大変悲しみ深いことではあるが、享年99歳、ご健康であったと伺っており、まさに天寿を全うされたと言ってもよいであろう。ただ、お心残りなことといえば、2007年は先生が長年主任教授として主宰されてきた京都大学文学部地理学講座（1947年助教授・50年教授）の創設100周年にあたり、この日を迎えるのを楽しみにしておられたのが叶えられなかったことであろう。

1957年7月7日本会の前身西アジア研究会の発足以来、先生が果たされた本会への数々のご貢献については多くの方々の心に強く刻み込まれているであろうが、私はそれを披瀝するに相応しい者ではない。ここでは先生との個人的な思い出を記し、長年のご薫陶への感謝の意と深い哀悼の念を表明することにした。

1954年4月、地理学専攻生となった私は当時助手のほかは教官としてはお一人であった先生のご講義を受けることになった。実は中学生の頃、街の書店で購入した『人文地理』の創刊号で先生のお名前を拝見していたが、その先生の教えを被るということで少なからず感激したことを思い出す。ご講義のテーマは前年から継続の古代地理学史で、ストラボンを中心に扱われた。私には全く新しい世界で大きな興味を抱いて拝聴し、ついには無謀にも卒業論文でストラボンを取り扱うことを申し出たところお許しただけのことになった。地理学の卒業論文の多くが具体的な地域研究であったにもかかわらずよくお許しくださったと思っている。以後今日まで曲りなりにも地理学史に関わることになったのはこの時の先生のご寛恕にあったと言ってよい。先生の古代地理学史に関するご研究は、京都大学文学部に学位請求論文（文学博士）として提出され受理された『古代地理学史の研究——ギリシャ時代』（柳原書店 1959）として大成される。

その後、西アジアや乾燥地域の地理について受講したがこれらは1959年に行われた京都大学イラン、アフガニスタン、パキスタン学術調査隊に参加されたことに関わりがある。その成果は、『文明の十字路——イラン、アフガニスタン、パキスタン学術調査の記録——』（平凡社 1962）で知ることができる。このとき先生が特に興味をもたれたのは地下水灌漑（カナート）であったと思われ、これについては本誌を始めいくつかの著作がある。また、カナートに類似する本邦のマブの総合調査にも参加されている。京都大学にアフリカ研究施設を創設する機運のあった頃、先生の監修で朝倉書店のアフリカ地誌や『人文地理』にアフリカに関する研究論文の展望を、教室の一同で執筆したこともあった。

なんとか大学院への入学を許された私は、修士論文のテーマとして宮崎市定先生ご所蔵のアラビア語の地理書を選んだところ、織田先生は即座にお許し下さってすぐさま教室架蔵のその書に関する欧文論文数点をお示し下さったのには驚くばかりであった。先生がイスラーム地理学にお詳しいことなど全く知らなかったのであるが、Piri Reisに関する論文を『地理論叢』1934に著わされていることから当然といってよいであろう。

在学中、年に一度の教室旅行や巡検、調査ではいつもお元気でユーモア溢れるお話で楽しい時を過ごしたことは忘れられない。お若いときに静養のために滞在された紀州の椿温泉や卒業論文で扱われた秋吉台を訪れたとき、先生としては珍しく昔の思い出を話しておられたのが印象深い。秋吉台では先生の卒論テーマが自然地理であったのを知ったのは一寸した驚きで、英書講読のテキストとしてマルトンヌの自然地理書の英訳本を採り上げられたのも納得の行くところであった。大学院修了以後は余りお目にかかる機会がなかった私ではあるが、『プトレマイオス世界図』（岩波書店 1978）の解説者に加えて頂いたり、細川護貞氏にご紹介くださって中世イスラーム世界図に関係のある熊本、本妙寺所蔵の『大明国図』の写真の入手のきっかけを与えてくださるなどいろいろとお陰を被った。

また、学年の近い同窓生が時たま先生を囲む集いを催した際にはよくお出かけいただいて楽しい会を持つことが出来、感謝の念で一杯であった。学会でもお目にかかる機会があったが、なかでも印象に残っているのは1998年11月7日、京都大学文学部で開催された日本古地図学会で、先生は1時間以上講演者の席にお着きになる暇もなく、ボードに地図や人名・地名などを書かれながら中央アジアのシルクロードについてお話になったが、そのお元気で力をこめたご様子には感服するばかりであった。先生は地図ばかりでなく絵がお上手で展覧会に油絵をととき出品されていたのを拝見したことがある。ご講演のあと懇親会場の京大会館までお供した時、皮製の大きめの頑丈そうな鞆をお持ちしたが、うかがうと西南アジア調査の折に持参されたものとのことであった。

先生のご著書のうち『地図の歴史』（講談社 1973）は当時あまり類書もなく、地理関係の本としては珍しいばかりに多くの部数刊行され、後にすこし手を加えられて新書として出版された。

1970年に京都大学を停年退官された後は関西大学に移られ、地図史に関するご授業をなさりながら論文を執筆されたが、そのうちにPiri Reisについての論文のあることが注目される。1978年関西大学ご退職後も一般書としては高いレベルの内容をもった『古地図の世界』（講談社 1981）や『古地図の博物誌』（古今書院 1998）を上梓され、古地図のもつ面白さをお教えた。最後になったが先生は、多くの古地図の大型図版を所載する『日本古地図大成』（講談社 日本編 1972、世界編 1975）を室賀信夫、海野一隆両先生と監修されており、後学の私たちの勉学や研究に大層役立たせて頂いたことを付記する。

なおここに掲載した先生のお写真は、ご逝去の10日前に古地図研究の愛弟子、三好唯義氏が撮影されたもので、そのとき大変お元気であったとのことである。氏のご好意に感謝の意を表して筆を擱くことにする。

（大阪大学）